

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 高良倉吉</p> <p>公開日: 2009-03-03</p> <p>キーワード (Ja): 沖縄県多良間島, 伝統的社会システム, 八月踊り, 琉球, 水納島, スツウプナカ (豊年祭)</p> <p>キーワード (En): Tarama Island, Okinawa Prefecture, Traditional society, Dance of August (8-gatsu odori), The Ryukyus, Minna island, Sutsuupunaka(celebration of a full harvest)</p> <p>作成者: 高良, 倉吉, 池宮, 正治, 山里, 純一, 玉城, 政美, 川平, 成雄, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 大胡, 太郎, Takara, Kurayoshi, Ikemiya, Masaharu, Yamazato, Junichi, Tamaki, Masami, Kabira, Nario, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Ogo, Taro</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027

多良間の民俗・二題

赤嶺政信*

はじめに

本稿では、多良間の民俗・二題、すなわち家の神とマツツー行事についてとりあげ、現地で収集した資料を中心にその整理を行い、同時にそれに関する若干の検討を加えることを目的とする。必要に応じて、宮古の他の地域の資料についても触れることにしたい。

1. 家の神

1. 家の神とは

1705年に編纂された、宮古に関する『御嶽由来記』という文献があって、その中の「嶋中祭祀之事」に、「五六月甲午節祝の事」として「右日ハ諸人未明ニ川江参リ水をあミ面々相応ニみき作り先祖霊前家の神かまの神へ祭申候」という記述が見える。さらに、「九月中ニ世の為たかへ之事」にも同じく「右祭ニは諸村家、より御花取つかさ村さはくりニテ其村嶽、江祭上ケ来年世か不うあらせ給ひと願申候百姓中もみき作り先祖霊前家の神かまの神祭五穀の種子を植始祝申候事」とある〔平良市史編さん委員会編：1981、P. 35〕。この史料から、当時の宮古においては、各家には原則として「先祖霊前」「家の神」「かまの神」の三つが祀られていて、主だった年中行事にはそれらが祭祀の対象になっていたことが推定できる。ここで、「先祖霊前」はいわゆる仏壇、「かまの神」はいわゆる火の神のことを指していることは間違いない。問題は、史料でいう「家の神」が何を指しているかということになる。多良間の「家」に係わる神霊についての資料を紹介しながら、最終的にこの問題について検討してみたい。

2. 火の神

屋内で祀られる神霊の中で確認が容易なものとして、火の神、仏壇の祖霊、マブルをとりあえず挙げるができるが、まず火の神の話から。火の神のことを、多良間ではヤヌカン（家の神）と称しているという事実は興味深い。火の神を「家の神」と称する事例は与那国にも見られるが、管見のかぎりで知られているのはこの2例のみである。もちろん、先の史料には「かまの神」が挙げられているので、史料でいう「家の神」は、火の神以外にもとめ

* あかみね まさのぶ 琉球大学法文学部教授

られるべきであることは論をまたない。

ヤーフクヨー（家葺き祝い、落成式）のときに台所に石を3個鼎立させ、棟梁がそこで火を燃やす。その石（竈）の上にススキの茎でつくった梯子のミニチュアが飾られるが、ヤヌカンは、その梯子を伝わっておりてくるという。火の神が天から降臨するというのは、道教の竈神の影響だとされる年末年始の火の神の上天・下天の話からの類推である可能性が高いように思われる。ヤヌカンは3名の姉妹神で、中央の石が次女のアニカマドゥ、向かって右側が三女のウトウガマ、左側の石が四女のウツウカマドゥだという伝承〔多良間村史編集委員会編：1993、P. 233〕は、他地域には見られない希有な例であろう。また、多良間のヤヌカン（火の神）は、以下で述べるようにマブルクミとかタマスウカビ⁽¹⁾と呼ばれる（特に子どもの）身体から遊離した靈魂の収納にも密接に関わっている。

子ども。マブル（靈魂）が抜けていると判断した時は、ユタやおばあさんがチマタ（辻）まで子どもを連れ出す。そこで小石3個を拾い、子どもの名前を呼びながら、「ついてきなさい」と言いつつヤヌカンの前まで連れてくる。ヤヌカンの前には普段はめったに食べられない豆腐や魚汁、御飯、粟のおにぎりなどを飾っておく。拾ってきた3個の石もヤヌカンの前に置く。線香を立て、子どものマブルがどこにも遊びにいかないようにと願い、その場で子どもに御馳走を食べさせる。小石3個は子どもの懐に入れてくるというから、その小石にマブルを附着させるという考えが窺える。上の方法は、マブルの所在が不明な場合の話であるが、遊離した場所が特定できればその場所でタマスウカビを行い、ヤヌカンの前で同様な儀礼をする。

また、林や海岸などで遊んできた子どもに湿疹などが出ると、それは魔物の作用によってできたカダマキだと判断されることがあった。カダマキができると、屋根の四隅から茅を数本抜き取り、それをヤヌカンの前で燃やして裸にした子どもの全身をあぶり、同時にヤヌカンの対して今後魔物の障りが子どもにおよばないように、と祈願したという。

さらに、出産の時の後産をシャコ貝に入れてヤヌカンの裏に埋めたという伝承もある。

原野などで迷い方角がわからなくなった場合には、石3つを竈形に鼎立させ、その中に枯葉などを入れて燃やす真似をし、「道に迷っていますので火の神様助けて下さい」と祈願したという話もある。ヤヌカン（火の神）が、多方面においてその靈験を発揮していたことがわかる。

3. 仏壇

多良間では仏壇のことをカンタナ（神棚）という。祖先を祀る祭壇を神棚と称するのは宮古の一般的特徴で、死者をしてカム（神）と称する語法に関係する。たとえば1768年に出された『与世山親方宮古島規模帳』に「茶毘之後於墓所神人別れとて一門親類縁者差毛酒肴持参喪主方よりは料理相調致馳走候由甚以不宜候間右体之仕付屹と可召留事（傍点引用者）」〔多良間村史編集委員会編：1986、P. 285〕とみえる。「神人別れ」は、伊良部島の佐良浜で聞くとくころではカンピトウバキヤーで、死者と生者との別れの儀礼であり、「神」が死

者で「人」は生者ということになる。史料では、葬式の日には墓所で行われているが、佐良浜では、葬式の日かあるいは2、3日以内に家にてこの儀礼をすると聞いた。ユタが司祭する儀礼で、「カンヌクイ（神の声）を拝ます」と称して死霊がユタに憑依して思いを語る（ここでも、死者のことを神と表現している）。最後に供物を屋外に出して死霊を送るが、死霊と村人が遭遇しないように通りを監視するという。

死者のことを「神」と表現する宮古の習俗に注目する仲松弥秀が、「かつて死者は即（三十三年忌を待たずに）神になった」という主張をはじめとして、氏独自の祖霊信仰論を展開しているのは周知の事実である〔仲松：1975〕。それに対して酒井卯作は「仲松氏の考えは、儒教の神の概念と日本神道の神の概念をとり違えていないかどうか。四本堂家礼にみられるように、沖縄でいう神はほとんど儒教によるもので、それは仏という意味以上のものではない。宮古島ではとくに仏壇を神棚と呼んだり、マブイ別しを神人別れと呼んだりして神という考え方が濃厚であるが、その一方では野辺送りのことを、昔は「捨てに行く」とか、「葬地は人に知らせるものではない」などともいい、もちろん年忌などはなかった」〔酒井：1987、P. 601〕と批判的な見解を述べている。ここではこの問題に深入りする余裕はないが、いずれにしても、死者を神と表現する習俗がなぜ宮古地域にだけ特徴的に見出せるのかは、依然として解明されずに残されていることだけは間違いない。

なお、多良間の仏壇に関しては、三十三年忌を境に死者の霊をウブダティと称する香炉で別途に祀るという他の地域では類例が見出しがたい習俗があるが、それについては別稿〔赤嶺：1998〕で紹介したのでここでは触れないことにする。

4. マブル

マブルは、基本的に家ではなく、以下に述べるように個人に係わる神霊である。個人がマブルを信仰するようになることを、「マブルをトモする」と表現する。その際には、ユタを依頼しての儀礼が行われるのが一般的である。「61歳になるとマブルをトモする」という説明も聞いたが、個人差があるようで、40歳の頃にトモした例や80歳にという例もある。若い年代でマブルを信仰するようになるのは極めて稀である。マブルをトモするのは男女を問わない。マブルは香炉によって表象されるが、その香炉の置かれている場所は、一番座であったり、二番座であったり、一番裏座であったりするが、「祖先（仏壇）より上（通常東側）」に置くべきであるという点では意見は一致しているようだ。マブルは人間の霊魂も意味するが、霊魂との関係は不明であり、個人の守護神という以外にその実体はつかみにくい。行事のたびごとに、火の神や仏壇とともにマブルを拝み、年明けの最初の家長の生まれ年の干支の日と年末最後の干支の日には、家長が自分のマブルに対して家族の1年の健康祈願とその感謝の祈願をする。人が死ぬとそのマブルもあの世にもっていく（灰の一部を紙に包み棺箱の中に入れる）。

大工が職能神として祀るという帝釈天は、マブルの香炉で祀られている。また、産婆は、仕事に出かける前に自分のマブルを拝んでいたというが、同じように職能神が意識されてい

たかどろかには不明である。

このマブルは、宮古の他の地域にも類例が見られる。筆者の調査資料に限って紹介すると、伊良部島の佐良浜と城辺町友利で確認することができた。佐良浜では、多良間のマブルに相当するのをマウと称し、ユタのアドバイスなどを契機にしてマウを祀るようになる例が多い。香炉によって表象されるのも多良間と同様で、祀る場所は二番座であったり裏座であったり一定しない。ある事例では、棟梁になったのをきっかけにマウを祀るようになり、その後自治会長になってからは自治会長のマウにもなっているという。豆腐屋を始めたのをきっかけにマウを祀るようになったという事例もある。ムヌスー（ユタ）も、「ムヌスー個人のマウ」を祀っているという。マウを祀っていた人が死ぬと、四十九日のときにマウの香炉を墓にもって行って捨てる。マウは、個人の守護霊であるという以外にはその実体が不明である点も、多良間と共通していると言えそうである。

佐良浜では、カンタナ（神棚）で祀られる祖先のことをマウカンと呼んでいる。個人が信仰するマウと祖先を意味するマウカンは、非常にまぎらわしいが、私の会ったある話者はマウとマウカンは違うと明言していた。しかし別の話者は、マウの香炉を置くマウダナ（マウ棚）の説明で、「個人のマウカンを祀る棚」と説明しており、判然としないものが依然として残る。

一方、友利のマウ（あるいはマウガン）は様相が異なる。友利でも、身体の不調などを契機に、ユタのアドバイスなどを経てマウを信仰するようになるが、そのマウがムトウと呼ばれる拝所（御嶽に類似する）の神を実体としているのが、前二者と決定的に異なる。自分がマウとするムトウの神を決める場合には、両親や祖父母などが信仰していた複数のムトウの神を候補とした神籤によって決定される。友利の場合には、結果として、ムトウを中心にして、その神をマウとして信仰する人たちが一種の氏子集団のようなものを形成することになる。このマウ信仰のありかたは、友利の近隣のいくつかの村落にも同様に（若干の変異はあるようだが）見られることが知られている〔琉球大学民俗研究クラブ編：1970〕。

宮古全体を対象にしたマウやマブル信仰の実態を把握し、その比較検討を行う作業が待たれるところである。

5. 床の神と家の神

床の神について、『多良間村史』では「トゥクヌカムも家の守護神である。床の間にお出になり、別に依代はない。毎年お正月に床飾りしてお供えする。新築して床の間が出来たとき、床の間にお供えして小宴を催しそれ以外は行事はない」と説明されている〔多良間村史編集委員会編：1993、P. 235〕。しかし、この床の間の床の神についての観念が、さほど古いとは考えにくい。ウズンバラヤーと呼ばれる掘立て小屋形式の茅葺き家屋は、一間しかないのも多く、床の間はなかったと言われているからである。明治45年生まれの話者によれば、自身が15歳の時に茅葺きから瓦葺きの家が変わったが、床の間があるのは瓦葺きの家になってからで、それ以前の茅葺きの家には床の間がなかったという。じっさい鶴藤鹿忠も、戦

後になってまでも床の間のない家が多良間に存在していた事例を紹介している[鶴藤:1972、P. 131]。

『村史』も指摘するように、現在正月に床柱(床の間の一角に立つ材質のよい太めの柱)によって表象される床の神を拝むのが一般的であるが、床の間のなかったウズンバラヤーの時代には、正月には家屋の真中に立つムヤーバラ(中柱)を拝んでいたという事例を確認することができる。このことは「ムヤ柱は(大黒柱)は家を支える中心である。・・家の完成後、酒等を供えるほか正月に一家の繁栄と幸福を祈る場所である」[琉球大学民俗研究クラブ編:1986、P. 32]という報告とも符合する。さらにある話者は、1月と12月に、両親が中柱の前の飯台に先述したマブルの香炉をのせて、マブルのニガイをしていたことを記憶していて、ムヤーバラは特別な柱だったと述懐している。大正元年生まれの話者は、かつて旧暦3月と6月に中柱を対象にした家祭祀があったことをかすかに記憶していたが、瓦葺きになってからそれが行われなくなったという。中柱が特別な意味を帯びた柱であることは、養子を迎える際の儀礼であるヨーシブンニガズの時に中柱を拝む、という報告[琉球大学民俗研究クラブ編:1986、P. 53]からも確認することができる。

中柱の重要性は、建築儀礼の内容からも窺える。まず、ヤーフクヨー(家葺き祝い)の時に、棟梁⁽³⁾によって中柱に対する祈願が行われる⁽⁴⁾。また、ヤークヨーから数えて三カ月目のミツキヌヨー(三月祝い)の儀礼⁽⁵⁾と3年目に行われる儀礼においても、棟梁が中柱に向かい三合花(粟あるいは米)、塩、酒、酒の肴、ミズバナ(椀に水を入れたもの)を供えて祈願をする⁽⁶⁾。

以上のことからして、かつては中柱が祭祀の対象になっていたものが、床の間の出現により、中柱から床の間あるいは床柱に祭祀対象が移行していった過程を想定することができよう。じっさい、近年行われた家の落成式において、棟梁が中柱ではなく床柱を拝んだという事例があるし、先述したように、正月儀礼でも中柱から床の神(床柱)へ祭祀対象が移行した例を確認することができるのである。これに関連して、着物を新調した時に「ムヤーバラの神様、立派な着物が新調できましたので、これを着る人は健康で長命にして下さい」と唱える習俗があること、さらに、大工は正月に大工道具を中柱の前に飾って拝んだといわれていることも指摘しておきたい。以上のことから判断すると、『御嶽由来記』にいう「家の神」は、中柱によって表象される家の神であった可能性が高いと思われる。この仮説を補強する多良間以外の事例を以下に挙げておく。

- (1) 家をつくる前のヤシキダミの儀礼に、屋敷の四隅と真中を拝む。家の落成後に中柱を拝む。落成して3年目の祝いの時にも中柱を拝む。トゥクルヌカン(「屋敷の神」)は、仏壇の先祖の香炉で祀られている。仏壇がなければ、トゥクルヌカンの願いは中柱に向かってする。器に砂などを入れて臨時の香炉とする。(平良市島尻)

トゥクルヌカンに関しては、島尻では「神人によれば、トゥクルヌカン・・とは、場所的にいって家の中心、家屋の中柱の方に存在するといわれる。先祖のイパイ(位牌)の置かれるタナ(カンタナともいう)があればそれに重合し、タナがトゥクルヌカンと

なっている。タナのない（位牌のない）家は、家屋の中柱・・がトゥクルヌカンの場所をあらわすのだという」[琉球大学民俗研究クラブ：1976、P. 34] という報告と符合する。また、島尻で「仏壇を拝むときは先祖のカンとかヤーヌカン（家の神）とか言って拝む」と聞いたが、それに関して同報告書には「パッタキムーン（嫁乞い）のときに嫁の家のカンタナを婿方の者が拝み、ユミサーイ（嫁入り）の日に嫁方の者が婿方のカンタナを拝む。カンタナのない家はヤーヌカン（トゥクルヌカンの中柱か？）を拝む（傍点引用者）」という、無視できない記述もある [同上、P. 34～5]。

- (2) 中柱のことをムムバラといい、家でカンニガイ（神願い）をする時に、仏壇のない家ではムムバラに対して行う。空き缶などに灰を入れて臨時の香炉とする。

（平良市大浦）

- (3) 現在、床柱を立てる時に祝いがある。家で酒を飲む時にまず床柱に酒を注ぐが、その時「ヤーヌカンに」といって注ぐ。

（平良市西原）

- (4) 家の落成式の時に、ニガインマが中柱に向かって拝む儀礼があった。中柱の次にウカマガンも拝んだ。中柱はいうならばヤーヌカンである。

（池間島）

- (5) 仏壇のない家ではどんなニガイ（祈願）でも中柱に向かってする。仏壇があれば、仏壇に向かってする。

（伊良部町佐良浜）

- (6) 家でのニガイの時、ユタが供物の一部を中柱と火の神に供える。

（伊良部町佐良浜）

- (7) 新築した家は3年間は神のもので、ヤーヌカンはまだ鎮座していない。三年祝いの時にヤーヌカンは来る。三年祝いの時に屋根の茅の一部あるいは棟瓦1枚を取り替える。また、棟に下げてあった米、塩、昆布も取り替える。三年祝いまでは、位牌を横にずらしておき、三年祝いのときにもとに戻す。ヤーヌカンは棟に宿る（棟と中柱の関係については後述）。

（伊良部町佐良浜）

- (8) 落成のニガイは二番座です。3年目にも同じことをする。トゥクルヌカン、ジャウ（門）ヌカン、ヤーヌカン、ウカマヌカンと口で唱える。

（伊良部町佐良浜）

- (9) 中柱は、自分の家の長男とみる。着物を新調したときは、それを中柱にくっつけ「パラヌチンヌクイクサー（柱の着物をもらって着ます）、着物は破れてもいいがヌシはいつまでも頑丈にさせて下さい」と唱えた。

（城辺町友利）

以上である。なお、中柱で表象される家の神の観念があるとすれば、その神の実体は何であるのかが問われねばなるまい。この問題については、八重山諸島の建築儀礼の問題を扱った別稿で論じたのでご参照いただきたい [赤嶺：印刷中]。

6. 棟の神

ところで、多良間には棟の神についての観念もあるので、それについても触れておきたい。ある話者によると、棟の神を「ウプグル・タカグルのカングナス」といい、それに対して人間のことを「ウプグル・タカグルの中のバタムスガム」という。お腹の中にある虫（蟻虫の

類?)のことをバタムスガマといい、棟の神に守られた家の中に住む人間を、お腹の虫にたとえたものである。彼女の母は、朝起きるといつもこの言葉を唱えていたという。天井のない茅葺きの家屋の棟の部分の所だけに板が張られていたのは、棟の神が女神で、下から覗かれないための措置だったともいう。ウプグル・タカグルは、大グル・高グルかと推測できるが、グルについては不明である。沖縄古語のコロに繋がる可能性もあろうか。

棟上げの時に、棟木に紫微鑿駕という字を書くのは沖縄各地と同様で、多良間でこの習俗は「多良間に来た沖縄の人が教えたらしい」と伝承されている。棟木の両端に「霜柱、貫氷、雪桁」(霜柱、氷の貫に雪の桁)「雨垂木、露葺草」(雨の垂れ木に露の葺き草)という詩も書かれた。明治30年代に学校が建築された時に、沖縄から来たアカンミシュという大工が、大工の技術や道具を多良間に伝えた、という話にも注意を向けておきたい。棟に塩とパヌニ(花米)を紙に包んでつるすということもあった。また、屋根が葺き上がった段階で、豊祭りと呼ばれる儀礼があり、豚をつぶし、その耳皮と頭皮をきざんだものを重箱に入れ、豊の上にお供え、屋根葺き作業の中心になった人が祈願をしたというのが、棟の神との関係は不明である。さらに、壊した家屋の棟木を屋敷外に出してはいけない、という伝承もある。

『多良間村史』には「棟の神は、家の守護神である。家を解体するとき棟梁が司どり、お供えものをしてお告げ申し上げ、新築工事が終了したら、またお供えものをして神のご降臨を仰ぐ行事をする」[多良間村史編集委員会編：1993、P.234～5]とあるが、これも詳細は不明である。

家屋の棟が特別なものとして観念されていることを窺うことができるが、しかし、棟そのものが家祭祀において儀礼の対象になっているわけではない。大工の棟梁経験のある話者による次の話に注目したい。昭和12年頃、茅葺きの家を壊して瓦葺きの家を建てる際に、茅葺き家屋の「棟の神」と「ウカマの神(火の神)」にこれから壊しますのでという案内と工事安全の祈願をした。棟の神に対する祈願は、中柱は棟の神に通じているということで、家の中で中柱に向かって行った。「中柱は棟の神に通じている」という表現は、中柱が棟を支えるという家屋構造のありかたに因むものであろう。宮古の城辺町友利で聞くところによれば、中柱のことをンニカミバラ(棟を頂いている柱)とも称する。多良間で、棟上げの儀礼は中柱に対して行うという事例があったが、これにも中柱と棟の連続性が表現されている。

問題は、中柱と棟のいずれに比重が置かれているかということである。中柱を拝むのはそれが棟木に接続しているからだろう、とある話者は言うが、沖縄全域の資料状況からして筆者は、中柱信仰の方がより本質的であると考えている。多良間に関して言うと、パラタテニガイ(柱立て願い)について「上棟式」のことである[多良間村史編纂委員会編：1973、P.259]と説明していることに、そのことを窺うことができそうである。この点および中柱に宿る神の性格については、別稿で検討したのでご参照いただきたい[赤嶺：1985および1992]。なお、日本本土の建築儀礼においても、「建築儀礼の中心は棟上げで建前ともいい、今日、建前といえは棟上げをさすが、本来は柱立てをさしたものと考えられ、古くは「立柱上棟」と称し、両者は一つの儀式であった場合が多い」[大塚民俗学会編：1972、P.240]と指摘され

て点にも留意しておく必要がある。

2. 9月のマツター

9月の癸丑の日のウガンプトウキ（御願解き）という行事には、御嶽の周囲に注連縄を張りめぐらし、トゥブリ（海岸に通じる名称のついた小径で、宿道という別称もある）の掃除が行われる。9月に年の区切りとなる願解き（結願）があるのは不可解だが、「マツターはウガンプトウキから九日目にくる」との説明がウガンプトウキとマツターが一連の行事であることを示唆している。この問題については中鉢良護氏の論考〔中鉢：1999〕があるのでそれに譲るとして、マツターには、トゥブリを通して竜宮の神が上陸する（だからトゥブリの掃除をする）、という解説がある点だけをここでは指摘しておく〔多良間村史編纂委員会編：1973、P. 297〕

まず、マツターという用語であるが、パルマツター（畑のマツター、後述）という用法もあることからして、マツターの意味かと推測される。ただし、なぜこのふたつの行事に限ってマツター系の言葉が用いられているのかは不明である。

マツターはウガンプトウキから9日目の辛酉に行われるが、その前日をアラビという。アラビには、ナウダニ（ナウの語義は不明だが、よく実る穀物の種子のことだという）を満載した神の船がウプトウ（あるいは唐）からやってきて、集落の北西の方向にあるウブドゥマイ（大泊）に入港するという。大泊のフシェーラには、その神の船の艦綱を繋ぐものとされたトゥンバラ（岩）がかつてあった。このトゥンバラは、形が馬に似ていたのでヌーンマ（乗り馬？）トゥンバラとも呼ばれた。島に上陸した神は、大泊近くのナガンミ⁷⁾山周辺から始まって島全体の畑に種蒔きをするが、その開始時刻が午後3時頃と考えられていて、それまでにはすべての人が畑から家に戻ることにしている。

マツターの日の夕刻には、カムカカリヤンマ（神憑りする女性の意味、ムヌスーとも）に係わるユブリという行事があった。「多良間島往復文書控」に「世振等報告のため渡海」として「右世振之成行並嵐之為御届押舟差登申候間御用筋相濟次第早々帰帆被御申付度奉存候也」〔多良間村史編集委員会編：1986、P. 443〕とあるが、「世振」がすなわちユブリで、元来は作物の出来・不出来のことを意味しているようである。カムカカリヤンマによるユブリも、来たる年の豊作・不作に係わるものであった。すなわち、カムカカリヤンマにマツターガム（マツターの神）がおりてきて、来る年の豊年・凶作についてカムカカリヤンマの口を介してマツターガムがメッセージを発すると考えられていた。

この儀礼はカムカカリヤンマ個人の家で行われ、マブルの香炉の前に供物が飾られていたというから、ここでもマブルが職能神と重合していることが窺われる。ユブリの儀礼に村落が関与することはなく、供物はカムカカリヤンマ本人によって準備された。大正生まれの話者は、パガマ（屋号、以下同じ）のンマ・古謝ンマ・手登根ンマ・ウフヤーのンマなど、5、

6名のユブリに係わるカムカカリヤンマがいたことを記憶している。ユブリの場には、神の言葉を聞くために子どもたちも含めた大勢の人々が庭にもあふれるほど集まったという。ここでいうカムカカリヤンマは、ツカサとは異なり、御嶽などでの公的祭祀に関わることはなく、あくまでも個人の依頼に応じて対処する職能者であったようだ。現在島には、カムカカリヤンマは一人もいないという。

なおマツツーの日には、子どもたちが、島でカビトゥリ（紙鳥）と称している凧あげで遊ぶ習俗があり、水納島出身者によれば、水納ではマツツーの凧あげについて、神が凧を伝って降りてくるという伝承があった。

マツツーの翌日は、神が島を去るとされる午前10頃までは畑に出てはいけなかった。その日をウーバライ（ウーバラーとも聞こえる）と称していたというが、その語義については不明である。

最後に、パルマツツーについてもついでに触れておきたい。かつて行われていた行事で、5、6月頃に、自分の所有するすべての畑において、畑の神に感謝をする儀礼であった。村一斉に行われるのではなく、家単位で日選りをして行った。畑の神とは言っても、じっさいには畑の真中で南に方向に向き、ウマヌパヌカンガナス（午の方の神）あるいはウマヌパヌユーヌヌス（午の方の世の主⁽⁶⁾）に感謝をしたという。

【註】

- (1) 魂をウカビするという表現だが、ウカビとはどういう意味か。道などでヘラや鎌を拾うと、それは鍛冶神のものだから私物化してはいけないので「どこどこで何々が落ちていたが、心あたりのある人はいないか」とロコミで情報を流すことになる。落とした本人がそれを受け取りに行くことを「ウカビに行く」という。お金などをなくし、それを拾った人から受け取る時も同様に「ウカビに行く」と表現される。このことからして、ウカビには「うやうやしく頂く」という意味があることがわかる。
- (2) この問題については赤嶺 [1997 および 1998, P. 175~200] もご参照いただきたい。
- (3) 棟梁の祀る帝釈天は棟梁個人のマブルの香炉で祀られるが、図像などが特にあるわけではない。手始め（起工式）、落成式後の3カ月目、3年目のそれぞれの儀礼の時に、家主から棟梁に贈られる三合花（米）、酒、酒の肴などが帝釈天に供えられた。
- (4) ヤーフクヨーには、他にヤーコーヨーズ（家を買う祝い）という儀礼が行われる。家が完成してこの儀礼が済むまでは、単に棟梁が家を建てているのであって、誰その家であると言ってはいけないと注意されたという。祝いの座で、口頭で入札を行い、家主が高値をつけて落札し棟梁から買い取る手続きをする。落成式の日棟梁から儀礼的に家を買う儀礼は与那国にもあって、この問題については別稿で論じたのでご参照頂きたい [赤嶺：印刷中]

また、ヤーフクヨーの祝い座では、若者二人で次の祝い歌が謡われた。アラパニ（新しい羽根、芽を羽根にたとえる）ヌ ウユワイ/モトイティ ナウリ/キタムニ（柘と棟）ヌ ウユワイ/モトイティ ナウリ。その後、「君はこの家にどんなニガイをしたか」と一人が問うと、他方が「スガーガー（井戸名）のガジマルとナガシガー（井戸名）のガジマルの、根は根と、枝は枝と交差するまでもこの家が頑丈であるように」とか、「グキンという草がマーラン船の柱に使えるようになるまで頑丈であるように」などと答える儀礼的問答が行われた。スガーガーとナガシガーは、遠く離れた場所にある井戸である。

- (5) 新築して3カ月目の儀礼が済むまでは、祝いの座には出てもいいが、葬式など不浄の所へ行ってはいけない、と聞いたが、『村史』ではミツキヌヌショウズバリ(三月の精進晴れ)という用語が紹介され、「三ヶ月に謹慎を解く。家を造って三カ月目に酒、肴、水のはなを供えて謹慎を解くお祈りをする。三カ月間は葬式やお祝いにも行かず謹慎するようになっているからである」と説明されている[多良間村史編集委員会編：1993、P.102]
- (6) 『与世山親方宮古島規模帳』に「家致普請候時朔日祝並三年祝とてみき酒ふた杯殺村中相揃致呑喰候由無益之造作ニ候間可召留事」[多良間村史編集委員会編：1986、P.283]とあるので、落成後の3年目の祝いが当時から宮古で一般的に行われていたことがわかる。なお、「朔日祝」については不明。
- (7) ナガンミ山にまつわる次の話がある。この山は龍の形をしている。かつてこの龍は、唐(海の方)に向き唐を食べて(?)いたが、それを知った唐の人が怒ったために向きを反対にした。ナガンミ山に隣接するキーズ山は、向きを変えた龍の食料となすための山であったという。キーズ山とは、字が管理する山で、かつては薪や建築資材となるススキや茅を供給する山であった。仲筋、塩川ともにそれぞれキーズ山がある。なお、キーズ山周辺の土地が肥えているのは、かつて龍が唐に向いていたときの龍の排泄した糞によるものと言われる。
- (8) 「午の方の神」は、宮古で広く信仰されている方位神であるが、多良間の場合次の点に留意しておきたい。午の方の角が十字路に接している屋敷の場合、その角を石垣などで囲い、それをベツカフツ(別の屋敷)と称している。午の方に接する空間に別の屋敷を設けるということは、午の方向からもたらされる悪い影響を防ぐためかと判断される。そうすると、「午の方の神」はユー(豊穰)をもたらす存在であると同時に、場合によっては悪い影響をも及ぼす両義的性格として意識されている、ということになるのか。

【参考文献】

赤嶺政信

1985 「トゥハシリ考ー沖縄の家の神についての一試論ー」 『歴史手帖』13-10 名著出版

1992 「八重山諸島の建築儀礼ー中柱信仰とユイピトウガナシをめぐってー」

『沖縄文化』76 沖縄文化協会

(印刷中) 「建築儀礼にみる人間と自然の交渉ー沖縄・八重山諸島の事例からー」

大塚民俗学会編

1972 『日本民俗事典』 弘文堂

酒井卯作

1987 『琉球列島における死霊祭祀の構造』 第一書房

平良市史編さん委員会編

1981 『平良市史第3巻資料編1』 平良市役所

多良間村史編纂委員会編

1973 『村誌たらま島』 多良間村

1986 『多良間村史第2巻資料編1 王国時代の記録』1986 多良間村

1993 『多良間村史第4巻資料編3 民俗』1993 多良間村

1972 鶴藤鹿忠『琉球地方の民家』 明玄書房

中鉢良護

1999 「宮古の年中行事の総括ー多良間島の年中行事の見方ー」

(琉球大学法文学部の1999年度後期の「民俗学研究」の講義資料)

仲松弥秀

1975 『神と村』 1975、伝統と現代社

琉球大学民俗研究クラブ編

1970 『沖縄民俗 18』 琉球大学民俗研究クラブ

1976 『沖縄民俗 22』 琉球大学民俗研究クラブ

1986 『沖縄民俗 24』 琉球大学民俗研究クラブ